第23回 夏期福音特別集会（1）

パウロの回身の歴史的意義

――ロマ書他――

１９７６年８月20日（鹿沢）
小池辰雄

聖書は神さまの実劇　アブラハムの召命　モーセの召命　アモスの召命　ホセアの召命　エレミヤの召命　イザヤの召命　パウロの召命　霊的傲慢が最大の罪　パウロの回心　人間の構造　霊的人格としてのキリスト　われキリストと共に十字架せられたり　キリストわがうちに在りて生きたもう　十字架・復活・聖霊は三相一貫　然るに今や　視よ今は救の日なり　今、私と一緒にパラダイスだ　永遠の根源現実　未来に対しての歴史的意味

●聖書は神さまの実劇

聖書は教訓の書ではない。「キリスト教」なんて言うと、教えかと思うけれども。

「私は何も教えない」

とキリストは言ってらっしゃる。お釈迦さんも、

「八万四千の法を説いたが、一つも説かなかった」

と言う。大体、教師というものは、教えるという意識ではダメです。告白なんです。お釈迦さんもキリストも止むにやまれずして告白していた。それが教えといえば教えになっただけのはなしです。聖徳太子も、

「語るも聞くも同じことだ」

と言っています。これは私が言った言葉なんだけれども、実は聖徳太子がその前に言っていたことに気が付いて、やはり大先輩がいたと思った。私は神さまに押し出されてものを言うし、あなた方も神さまに押し出されて聞いていてください。

一番大事なもの、一番尊いもの、一番深いものは誰でもが無条件に得られるものです。「これだけの条件がなければ得られない」というものではない。そういうように神さまはあなた方一人ひとりをつくってある。一人ひとりは絶対なんです。人間の関係は相対です。相対だけれども、相対関係の中に一人ひとりは絶対者なんです。なぜかというと、神さまとの関係があるから。神さまとの関係があるところに、絶対なものがあるので、神さまとの関係がないところには絶対なんかない。ところが、神さまとの関係を切ってしまって、絶対みたいな顔をしているから、とんでもないことになってしまう。相対にして絶対というわけです。

聖書は教えではない。これはドラマ、劇なんです。人間のつくった劇ではない。神さま

の実劇、本当の劇です。聖なる劇、オラトリウム（聖劇）、劇文学です。シェークスピアがどんなに偉くたって、聖書にはかなわない。これはどのドラマよりも面白いのだから、かしこまらないで、ぜひ、そういう意味で読んでください。

人間というのは、整っているような顔しているけれども、みな「破れ」です。魂も肉体もみな破れている、破れの存在です。破れないような顔している者をキリストは偽善者と言う。

「偽善なるかな、学者、パリサイ人よ」

とキリストが言った。一番偉そうな顔して、整ったような顔している連中、

「私は道徳のチャンピオン、宗教のチャンピオンである」

なんて思っているのは、キリストはみな嫌いだった。そういうのはキリストの敵なんだ。キリストほどの道徳・宗教のチャンピオンはいません。ところが、彼は自分では決してそう思ってない。だから私は、キリストは自分を何者ともしないから、「無者」という。

我々はそういう無者修行をするわけです。キリストと同じように無者修行をしなくては。楽になったでしょ。何にもならなくていいというのだから、こんな楽なことはない。在るがままでいい。在るがままでいいけれども、在るがままの自分を投げ出すことが大事です。ぶっ倒れることです。立てというのではなくて、ぶっ倒れろというのだからいいではないですか。

そういうように聖書に臨んでいただきたい。毎日ご飯をたべますが、聖書は毎日――たった一句でもいい――必ず読む。目で読むのでも、頭で読むのでも、心で読むのでもない。身体で読む、全身で読む。身読（しんどく）せよという、これは日蓮の言葉です。

私は、誰が言おうと、何でも本当のものを貴ぶ。真理は私してはいかん。真理は神さまのものです。信仰もそうです。信仰も私したらダメです。「私の信仰、私の信仰」といって、一生懸命で信仰を強くしようと思うと、終いにくたびれるよ。

●アブラハムの召命

今日は「パウロの回身の歴史的意義」という題でお話します。パウロはユダヤ人です。それで、ユダヤ人の先輩、パウロの先輩を少し見てみましょう。

大先輩にアブラハムというのがいる。アブラハムはアラビアの北のウルにいて、神さまに呼ばれた。これを「召命」という。

「ここにエホバ、アブラハムに言いたまいけるは、汝の国を出（い）で汝の親族に別れ汝の父の家を離れて我が汝に示さん其地に至れ。」（創世記12・1）

アブラハムは神さまに、

「お前は家郷を出て、私が言う所に行け」

と言われた。「出（い）で、出で」と書いてある。出ウルです。神さまに召されることは、自分の運命環境から出ることなんです。彼は神さまに呼ばれて、素直に行った。従順に従った。

「行く所を知らずして出で往けり」

と新約聖書にも書いてある。

聖書の宗教は、こちら側から求めるよりも、むしろ上から呼ばれ、つかみかかられる。だから、啓示の宗教なんです。けれども、アブラハムだって、ただボヤーッとしていたわけではない。何かしらんけれども、普段から神さまを信じていたことは事実です。神を信ずるとは具体的には神に祈ること、祈信です。祈と信とは同じです。

「信」ずるという字は、人偏に言と書く。言を受ける、神の言をその人が受けるということ、人間が全存在で言を受けることが「信ずる」なんです。全存在で神さまの言を受けること。だから、アブラハムは神さまを信じて出かけて行った。言葉を受けて出かけて行った。信念ではない。人間は誰でも、何か人間以上のものの前に頭を自然にさげたくなるはずのものなんです。

●モーセの召命

その次はモーセです。これは非常にハッキリしている。出エジプト記3章。半奴隷状態にいたヨセフ族の中のモーセは、どうも混血児であったらしいが、自分の同胞のために人殺しをしてしまった。そして、シナイ半島の方へ逃げていった。牧場で羊飼をやっていた。ホレブの山で何か燃えていた。けれども木が燃え尽きない。変な火だなぁと、行ってみたら、霊火が燃えている。火の中から、

「モーセよ、モーセよ、我はなんじの父の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神なり……。イスラエルの民が苦しんでいるから、私は助けてやろうと思うが、お前、行け」

「いや、とてもできません」

「私がお前と一緒にいるから」

と。そこで、モーセはその言葉に力があるものだから、

「はいっ、それでは参ります。皆が、あなたは何という名前ですかと聞いたら、何と言ったらいいですか」

「我は在りて在るものである」

と。あれはもとは、

「我は在るであろうところの者で在るであろう」

と訳した。ルッターもそう訳した。この頃の学者は、

「我は在りて在るもの」

と訳すようになった。私は、

「我は在りて在らしむるもの」

と訳す。文法的には少し無理かもしれないけれども、文法なんかは私は破ってしまう。神

さまはあるいは、「我は在りて在るもの」と仰ったかも知れないよ。けれども、もう一つその奥をさぐると、「我は在りて在らしめるもの」ということです。これがもっとも深い把握であると思う。

太陽が在るということが地球を在らしめている。神さまが在るということが我々を在らしめている。信ずると信じないとに関わらず、どんな駄々っ子も、どんな悪い奴もみな在らしめられている。そのことに本当に気が付いたら、ぶっ倒れるはずですよ。

モーセは神さまに呼ばれて、「はいっ」と言って行きました。これがやはり召命ということ。ドイツ語で「ベルーフ」、英語で「コーリング」という。神さまに呼ばれること、そこにその人の使命があるから、それを天職という。

皆さんはみな神さまに召命されるんだよ、呼ばれるんだよ、男でも女でも。自分は生涯これをもって、自分の打ち込んだ在り方をもって神さまを証しする、そのように神の言を受けるのが本当に召命を受けているということです。

●アモスの召命

アモスという預言者がいます。

「アモス対えてアマジヤに言いけるは、我は預言者にあらずまた預言者の子にも非ず、我は牧者なり桑の樹を作る者なりと。然るにエホバ羊に従う所より我を取り往きて我が民イスラエルに預言せよとエホバわれに宣えり。」（アモス7・14～15）

「アマジヤ」というのは祭司です。アモスはユダの荒野で牧者をやっていたところが、イスラエルの国のベテルで預言した。お祭の時に行って大声で叫んでしまった。これはアモス書の始めの方に出ています。いわゆる「預言者」という職業があった。「私はそういう預言者のグループではない」ということ。エレミヤがやはり、職業的な祭司の子でしたけれども、そういう祭司ではない。アモスは職業的預言者の部類のものでもない。預言者というのは神さまに直接に、単独に呼ばれる単独者です。アモスはそういうように呼ばれて、「はいっ」と行きました。

●ホセアの召命

ホセアという預言者がいる。これはどうも余りかんばしくない女性と結婚させられた。他の男と関係して子供をつくったりした。ホセアは非常に悩むわけです。怒りもし、悲しみもし、悩みもしたわけです。ところが、

「エホバわれに言い給いけるは、汝ふたたび往きてエホバに愛せらるれども転りてほかのもろもろの神にむかい葡萄の菓子を愛するイスラエルの子孫のごとく、そのつれそうものに愛せらるれども姦淫をおこなう婦人を愛せよ。

「不貞の奥さんを愛しなさい。イスラエルの民は私に対して宗教的な姦淫者である。他の神々を、偶像を拝んでいるが、それでも私はイスラエルを捨てない。お前もそのように捨てるな」と。そこで、

われ銀十五枚おおむぎ一ホメル半をもてわが為にその婦人をえたり。我これにいいけるは、汝おおくの日わがためにとどまりて淫行（まちがった事）をなすことなく他の人にゆくことなかれ、我もまた汝にむかいて然せん。」（ホセア3・1～2）

「我もまた汝にむかいて然せん」

この一言が非常に大事な一言です。

「私もお前にそのようにあるよ」

と、相手の位置に自分をどん底に落として置いている。

姦淫の女を捕まえてこれをやっつけようとした時に、キリストはその女に、

「我も汝を罪せじ」

と言われた。相手の位置に自分を本当に置いて、相手を救い上げてしまう。それを担いの愛という。ドロ沼に落ちたのを、自分がやはりドロ沼に入って――上から何か棹でやるのではない――自分もドロンコになって相手を担ぎあげてくる。そういう愛です。そのようなのがホセアの、神さまから受けた具体的な召命の仕方です。

●エレミヤの召命

預言者エレミヤの始めの方に、

「われ汝を腹につくらざりし先に汝をしり、汝が胎をいでざりし先に汝を聖め、汝をたてて万国の預言者となせりと。

これは大変な言葉を聞いたものだね。

我こたえけるは噫主エホバよ、視よわれは幼少により語ることを知らず。

まだ二十才くらいだよ。

エホバわれにいいたまいけるは、汝われは幼少という勿れ、すべて我汝を遣すところにゆき、我汝に命ずるすべてのことを語るべし。なんじ彼等の面を畏るる勿れ、そはわれ汝と偕にありて汝をすくうべければなりとエホバいいたまえり。

ここでも、

「汝と偕に在り」

と神さまが仰った。神さまが偕にあるということは力をもって在ることです。

「とこしえの右の腕をもって」

なんていう言い方をしている所もある。イスラエル人は神さまを非常に具体的に人格的に

――しかも偶像にはしない――表現する。霊的で人格的です。これが仏教とは違う。神さまは最高の存在だから、こちら側の強いか弱いかということは問題でない。最高の存在に守られたら、もう心配はいらない。あなた方、本当にその気になってくださいよ。その気になるということはただの気ではない。神さまの中に自分を投げ入れなければ。「さぁ困ったな、神さまは分からないな」なんて。どうやったら投げ入れられるかは後からお話します。

エホバ遂にその手をのべて我が口につけ、エホバ我にいいたまいけるは、視よ我が言を汝の口にいれたり。（エレミヤ1・5～9）

神さまの手が口にあたって、神の言が入ってきた。

聖書には形容詞はない――文法的な形容詞はあるでしょうけれども――形容してものを言ってない。聖書の言っていることは、語っているよりもっと凄い現実なんです。言葉の奥の世界をつかまえなければダメです。

「儀文は殺し、霊は活かす」

とパウロが言ったが、眼光紙背に徹しなければ。「これはどういう意味だ」なんてやっているうちはダメです。聖書は、驚いて驚嘆して、驚嘆驚倒して読むべき書である。驚嘆驚倒して読むと、その世界に入れる。

「こういうことがあるだろうか。聖書に書いてあるから、仕方がない、信じておこう」なんてやったって、いつまでたっても始まらない。大体そういうのが多いようだね。

エレミヤは神さまにしっかりとっ捕まって、ひっぱり回されてしまった。そういう召命の仕方です。

「もういやだ、もう御免だと言っても、なお神の言はわが骨のうちに火が燃えるが如くなれば」

と20章に書いてある。

「是をもて我かさねてエホバの事を宣ず、又その名をもてかたらじといえり。然どエホバのことば我心にありて火のわが骨の中に閉じこもりて燃るごとくなれば忍耐につかれて堪難し。」（エレミヤ20・9）

という。

●イザヤの召命

旧約の預言書は読んでくださいよ。もう一人、チャンピオンがいたね、イザヤです。

「ウジヤ王の死にたる年

というのは紀元前742年です。

われ高くあがれる御座にエホバの坐し給うを見しに、その衣裾は殿にみちたり。セラピムその上にたつ、おのおの六つの翼あり、その二つをもて面をおおい、その二つをもて足をおおい、その二つをもて飛翔り。

「セラピム」とは火焔天使です。神さまの前は畏れおおいから、隠しているんだ。

たがいに呼びいいけるは聖なるかな聖なるかな聖なるかな万軍のエホバ、その栄光は全地にみつ。かくよばわる者の声によりて閾のもとい揺りうごき家のうちに煙みちたり。このとき我いえり、禍いなるかな我ほろびなん。我はけがれたる唇の民のなかにすみて穢れたるくちびるの者なるに、わが眼は万軍のエホバにまします王を見まつればなりと。ここにかのセラピムのひとり鉗をもて壇の上よりとりたる熱炭を手にたずさえて我にとびきたり、わが口に触れていいけるは、視よこの火なんじの唇にふれたれば既になんじの悪はのぞかれ、なんじの罪はきよめられたりと。我またエホバの声を聞く、曰くわれ誰をつかわさん誰かわれらのために往くべきかと。そのとき我いいけるは、われ此にあり我をつかわしたまえ。（イザヤ6・1～8）

「はいっ」という言葉が「われ此にあり」という言葉です。

「はいっ、どうぞ私をお遣わしください」

ということ。即ち、霊火でもって聖められたわけです。これが非常に明らかな召命です。この時は特に罪のことが問題になっている。罪の潔めということ。日本では「みそぎ」というようなことをやる。日本では「罪」というより「けがれ」という。

●パウロの召命

こういうのがみな神さまに召命されたわけです。それではパウロさんの召命はどうであったか、というわけです。その前にステパノという霊的な人物がいた。

「お前たちは常に聖霊に逆らっている」

とステパノが言ったときに、サウロ（後のパウロ）もその言われた者の一人だったから、いきりたって、けしからんというわけで、ステパノを石で撃って殺してしまった。そのことが使徒行伝7章54節以下に書いてある。

「斯くて彼等がステパノを石にて撃てるとき、ステパノ呼びて言う『主イエスよ、我が霊を受けたまえ』また跪ずきて大声に『主よ、この罪を彼らに負わせ給うな』と呼わる。斯く言いて眠に就けり。」（使徒7・59～60）

ステパノは血にまみれて天界に行ってしまった。最初の殉教者です。それをサウロ（パウロ）はよしとしていた。

「サウロは主の弟子たちに対して、なお恐喝と殺害との気を充たし、大祭司にいたりて、ダマスコにある諸会堂への添書を請う。この道の者を見出さば、男女にかかわらず縛りてエルサレムに曳かん為なり。

みな牢屋にぶち込もうとする、憲兵みたいなんだ。

往きてダマスコに近づきたるとき、忽ち天より光いでて、彼を環り照らした

れば、かれ地に倒れて『サウロ、サウロ、何ぞ我を迫害するか』という声をきく。彼いう『主よ、なんじは誰ぞ』答えたもう『われは汝が迫害するイエスなり。起きて町に入れ、さらば汝なすべき事を告げらるべし』

この「べき」は「デイ」という字で、「お前がどうしてもしなければならない事」という強い意味です。

同行の人々、物言うこと能わずして立ちたりしが、声は聞けども誰をも見ざりき。サウロ地より起きて目をあけたれど何をも見えざれば、人その手をひきてダマスコに導きゆきしに、三日のあいだ見えず、また飲食(のみくい)せざりき。（使徒9・1～9）

これは完全に霊撃された。復活のキリストに霊撃されたんです。預言者たちは、先輩たちはみな素直にこれを受けとってきました。ところが、サウロという人物はキリストを信ずる者を迫害していた。

「キリストは新興宗教のとんでもない、ユダヤ教に反するものだ」

と思ったわけだ。サウロはユダヤ教のチャンピオンですから、律法を拳々服膺(けんけんふくよう)して、

「律法の義につきては責むべきところなし」

と誇ることができた。霊的傲慢なんです。神に対して熱心なんです、ものすごく。

●霊的傲慢が最大の罪

神に対してこっちから熱心というのはヘタすると危ない。そういうのが他宗排撃をやる。日蓮があの点だけはちょっと間違った。日蓮は第一級の坊さんです。しかし、どうして他宗をあんなに排撃したか。それは自分が余りに自信があったからです。他の天台、真言、真宗、浄土真宗、禅宗、みなそれぞれ真理があります。日蓮ほどの人なら真理が見えるはずです。私たちは、キリストにでっくわしますと、そういうものを読んでも分かる。良さが分かり、限界が分かる。どうして、ケチ臭いクリスチャンが多いのだろうね、嫌になってしまうよ。

私は大自然が大好きで、雨が降れば雨となり、風が吹けば風となり、嵐が吹けば嵐となり、無風なら無風となる。なにか大言壮語するようですけれども、本当にそうなんだ。「四大」という、地水火風となってしまう。そういう単純なもの凄い真理というのがある。それは、突き抜けなければそうならない。どうしたら、突き抜けるのだろうね。私の言葉の中に響いているものを、皆さんは受けとっているでしょうね。意味ではないから。私は空々漠々としているね。私の本質なんか、あなた方、つかめないよ。こうやっていると、何か空中にあがりそうで困る。

サウロはキリストに反抗していた霊的傲慢者であった。霊的傲慢が最大の罪なんです。霊の世界は恐いですよ。「霊」なんていうと、「とにかく霊的になればいい」と思って、

「私はだいぶこの頃霊的に強くなってきた」

なんて言って、そのうちに傲慢になると、これはサタンの味方になる。サタンは霊的傲慢者の首魁（しゅかい）、親玉であるわけです。神さまに反抗して、

「俺も神の如くになろう」

と創世記に書いてある。サタンが「神の如くになる」と言って誘っている。神に従って神に化せられるということと、自分の方から神の如くなろうというのとは大違いだ。方向が180度ちがう。神に対する熱心は、ヘタすると、傲慢になる。サウロはユダヤ教において神に対して熱心なんだ。ユダヤ教を固執した。

キリストは、このサウロ――ユダヤ教のチャンピオン、パリサイ中のパリサイ人――の真剣さだけは見ている。

「しかし、とにかくこの魂は真剣だ。傲慢だけれども、これをひっくり返してやろう」

と。「パリサイ」というのはモーセの律法といろいろな戒めを非常によく知っていて、それを実行して自ら義（よ）しとして、自分たちは他人とは違う、「区別されている者、分かたれたる者」という意味です。そして、自ら任じているのを「パリサイ人（びと）」という。キリストはそういうのが大嫌いなんだ。それで、やっつけた。

この光景はどんなものですかね、誰か画家が描いているかな。こういう光景は、火の如くならなければ描けない。この三行くらいをいい加減な気持で読めない。ここへ来たら、パウロと一緒にぶっ倒れなければ。ドラマだから。この三行を一時間かかって読んだっていい、本当にその中に瞑想して祈りこんで、

「キリストさま、参りました！」

と。何がきますか、そこには。聖霊が来ますよ。

「聖霊とはどんなものか？」

と考えたって、絶対に来ません。何年考えたって、何年研究したって、来ませんから。一番いいのは、聖書でキリストにぶつかって、キリストの前に降参することです。降参したら、本当にぶっ倒れたら、聖霊が来ます。

神学者や牧師さんが一生懸命で聖霊の本を読んだり研究したりして、「について」いろいろなことを言う。いくら、「について」言ってもダメです。それは論文なんです。

パウロはひっくり返された。図に表せば、律法という四角いものがある。こればっかり一生懸命にやっていて、彼は四角くなってしまった。円現しない。四角いのはユダヤ的パリサイです。品行方正、学術優等のようなものだ。けれども、自ら任じているのはダメなんだ。丸いキリストはこの四角を丸くしようと思って、これをやっつけた。四角は四散してしまって、砕けこわれた。三日間、ぶっ倒されてしまった。

●パウロの回心

そして、アナニヤという弟子に示しが行っている。

「さてダマスコにアナニヤという一人の弟子あり、幻影(まぼろし)のうちに主いい給う『アナニヤよ』答う『主よ、我ここに在り』主いい給う『起きて直(すぐ)という街(ちまた)にゆき、ユダの家にてサウロというタルソ人を尋ねよ。視よ、彼は祈りおるなり。又アナニヤという人の入り来りて再び見ゆることを得しめんがために、手を己がうえに按(お)くを見たり』アナニヤ答う『主よ、われ多くの人より此の人に就きて聞きしに、彼がエルサレムにて汝の聖徒に害を加えしこと如何ばかりぞや。また此処にても凡て汝の御名をよぶ者を縛る権を祭司長らより受けおるなり』主いい給う『往け、この人は異邦人・王たち・イスラエルの子孫のまえに我が名を持ちゆく我が選びの器なり。我かれに我が名のために如何に多くの苦難を受くるかを示さん』ここにアナニヤ往きてその家にいり、彼の上に手をおきて言う『兄弟サウロよ、主、即ち汝が来る途(みち)にて現れ給いしイエス、われを遣(つかわ)し給えり。なんじが再び見ることを得、かつ聖霊にて満たされん為なり』直ちに彼の目より鱗(うろこ)のごときもの落ちて見ることを得、すなわち起きてバプテスマを受け、かつ食事して力づきたり。」（使徒9・10～19）

アナニヤに按手されたら、霊が伝わりましたから、パウロは、

「わが目より鱗のごときもの落ちたり」

と言って、四角いのがだんだん円現して、丸くなってきた。クリスチャンは球ですよ、円現を約束されている者です。

パウロは本当にキリストに参りました。そして、彼は荒野に出て祈りました。なにしろ、パウロという人物はとにかく、今までにユダヤ教を内容的にもしっかり学んで、努力してそれを行ってきた。また、当時の有名な文化都市のキルキヤのタルソで、ギリシヤ的な教養も受けている。血筋からいえばユダヤ人で、ローマ市民権をもっている。ユダヤ的なものとギリシヤ的なものと両面を彼はもっている。けれども、今までのものはもはや全部、問題ではない。パウロはこれを

「塵芥(ちりあくた)のごとく」

と言いました。けれども、塵芥のごとく思った今までのものを今度は、キリストは塵芥としないで、それを変質変貌して、パウロを通して自由自在にお使いになる。人間に与えられているいろいろな才能、資質、五感の感性というものは、みなそれ自身は悪くも良くもない。とにかく、頂いたものだから。どうしたら本当にそれが良いものになるのかということです。

人間の構造をパウロくらい良くわきまえている人はちょっとない。パウロ書翰を読んでみても、大変なものだ。「パウロの信仰と実存」なんて考えたって、これはどうにもならん。本当に大変なひとだ。パウロ書翰は、その時その時に必要に応じて書いた手紙で、論文でも何でもない。ところが、頭ででっちあげた論文よりもはるかに素晴らしい内容をもって

いる。頭で論理的に組織立てたものは大したものではない。上から奔流（ほんりゅう）してきて、グングン言わせられているものが本ものなんです。

●人間の構造

人間の構造を考えてみると、一番中心になるものは「霊」（ルーアッハ〔ヘ〕、プニューマ〔ギ〕、ガイスト〔独〕、スピリッツ〔英〕）です。これが「聖霊」（ト・プネウマ・ハギア〔ギ〕）と交わる直接の場です。それから、「魂」（ネフェシュ〔ヘ〕、プシュケー〔ギ〕、ゼーレ〔独〕、ソウル〔英〕）です。ヌース〔ギ〕は「理性や悟性」といわれているところです。その次に「心」（カルディア〔ギ〕、ヘルツ〔独〕、ハート〔英〕）がある。そういう内的な世界がある。それを受けとっている器が「体」（ソーマ〔ギ〕）です。この全体が人間、全人です。

パウロは生まれつきの人間を「第一のアダム」とか、「旧（ふる）き人」とか、「外なる人」とか言っているが、生まれつきの人間自身は、聖霊なしで、自己を中心としたところの自我で、これを「肉」（サルクス）という。「生来の我」を肉という。聖霊を受けとるところは、この「霊」が、また特に「心」（カルディア）が受けとる。もちろん、これは人間的な区別であって、完全に分析できるものではない。働きからいうと、そういうような区別ができるような事態です。

たとえば、ロマ書5章に、

「希望は恥を来らせず、我らに賜いたる聖霊によりて神の愛、われらの心に注げばなり。」（ロマ5・5）

とある。この「心」がカルディアです。

「聖霊が心に注いで来た」

というような言い方をしている。理性のところには聖霊は来ません。ハートの世界ですから。これが窓口みたいになる。「プニューマ」（霊）のところにはもちろん来ます。心の暖かい人は聖霊を受けやすい。パウロは心理的なところを知らないまに告白しているわけです。「ヌース」（理性）のことはコリント前書2章、ロマ書1・28に出ている。「プシュケー」（魂）という言葉はコリント前書の12章、14章にたくさん出ている。

要するに今一番問題にしたいことは「カルディア」（心）という字です。それから、プシュケーも近い。ヌースのところには聖霊はちょっと来にくい。けれども、聖霊を受けとれば、ヌースが非常にいい働きをして、エピグノーシス的な、霊智的な働きになってきます。受けとれば、この三つは連関してますから。人によってその強さが、理性的な人、魂的な人、心の人といろいろあるわけです。

人間は霊止（ひと）という。神霊が止（とど）まるのを「ひと」という。霊が中心で、この中心に神霊が本当にとどまれば、そして「神中心、キリスト中心、聖霊中心」になってきたときに、その人は「霊的」という。神・キリスト中心を「霊」という。ところが、「自己中心」は、どんなにそれが立派であっても、それは「肉」という。パウロの大きな分け方はそういうこ

とになっている。

パウロがパリサイ人で、特にヌースの非常に優れた人であった。また、プシュケーの非常に強い人だった。これが自己中心であった時に非常に一応、立派は立派なんだ。けれども、それは肉であることがパウロは自分でハッキリ分かった。それがロマ書8章に出ているわけです。

●霊的人格としてのキリスト

「聖霊を受けると、初めてキリストを主と言うことができる」

ということは書いてあるとおりです。

「ホ・キュリオス」（主よ）

という言い方は、完全にそのものとなる、その意志に従うということで、こっち側は僕（しもべ）です。パウロはキリストのことを――あるいは神さまのことも時には「主」と言ってますが――特にキリストのことを「主」と言う。

「ホ・クリストス」（キリスト）

という言い方ももちろんしています。「油注がれたる者」、即ち神の霊を受けた者ということ。けれども、そういった言い方の方がむしろ少し客観的な言い方になってしまう。もちろん、パウロはそれを固有名詞のように使ってますから、「ホ」（定冠詞）がなくてただ「クリストス」と言う。パウロは「イエス」と言ってみたり、「キリスト」と言ってみたりします。「イエス・キリスト」という言い方もしてますけれども、その「キリスト」には定冠詞がついてない。「キリスト」という一つの役名としては考えなかった。どこまでも、信頼の対象として、「イエス・キリスト」と言っていた。だから、「イエスース・ホ・クリストス」という言い方は一回も出ていない。

「ホ・キュリオス」（主）

という言い方が最も多い。

「ホ・ヒュイオス・トゥー・テウー」（神の子）

という言い方も相当でてきます。

「ホ・ソーテール」（救主）

という言い方もあります。

「イエスは主である」

と、パウロの一番深い自覚はキリストを主として、自分を僕とした。だから、

「我はキリストの僕である」

と言った。キリストに絶対従う者であると。

キリストに従ったら、彼は本当に自由になった。マルティン・ルッターが『奴隷意志論』というのを書いた。僕のときに初めて本当の自由があるという。即ち、キリストが絶対者

ですから、絶対なものがこの僕に来るから、絶対的な自由なんです。自由自在に動いている。それはキリストを見ればいい。キリストが正に神さまに対して絶対に自分を従順にして、

「汝の御意（みこころ）をどうぞ私を通して成してください」

と、自分を挺身（ていしん）しているわけです。自分を挺身して、「どうぞ」と言って、神さまに向かっていつも祈っている。だから、

「主よ、御意を成させたまえ」

という祈りは一番烈しい祈りなんです。あきらめた祈りではない。

「汝の御意を。それでなければ、私はやりきれません。私は本当の力がきません」

というわけです。

キリストはそのように神さまに絶対に服従した。服従したけれども、それは屈従ではない。喜んで従った。この僕は喜んで従う。喜んでということは聖霊が来なければ言えない。それでなければ、仕方なしに従うことになる。従うことが楽しくてしょうがなくなる。その自由は喜びをもった自由である。喜びがなかったらしょうがない。そして、それが霊的に一つとなると、一如のすがたになる。神さまをキリストは本当に信頼して、「父よ」と言った。「父よ」ということと、神さまを「主」と考えることとはまたこれが一つである。人格的であるということと、本当に従っていく霊的であるということが一つである。だから、霊的人格としてのキリストです。

「主は霊なれば……」

という言葉がある。あの「霊」というのは具体的な存在なんです。「霊」とは何か抽象的、観念的なものではない。

「主は即ち御霊なり」

というのは、もの凄く霊的な実体であるということです。霊的実体で、その実体は人格体である。だから、霊的な存在であるということと、人格であるということがまた離すことができない。そういう角度からの把握のし方、受けとり方が大事です。

●われキリストと共に十字架せられたり

そういうようにもう、律法ではなくなってしまった。律法はどこかへ行ってしまった。キリストは神さまの聖言を、聖意をすっかり受けとっていた。それが即ち活ける律法、新しき律法なんです。自分でもって活ける律法を、あるいは旧約の律法を本当にそこでどんどん活かしてしまった。律法を律法として取り扱わない。いわゆる律法はキリストは破ってしまった。けれども、本当の律法の精神は彼は守っていた。

「汝、殺すなかれ」

という言は本当は、

「汝は殺人はしない」

という言です。

「お前は殺人はしない。私がお前の神さまだから、お前は殺人なんかできっこない」

というのが本当の意(こころ)なんだ。律法の奥に福音が隠れていた。それを本当に受けとったのがキリストです。殺人ということの心理的な一番奥は人を憎むということです。

「憎んだものは殺したことと同じことだ」

とキリストは言った。キリストは律法の一番奥をつかまえてしまった。人を憎まない。敵をも愛してしまう。愛するというのは、敵を全部救ってしまうこと。感情的に愛するのではない。人を救うことです。本当に内側から神の霊を受けとれば、みなそうなっていく。言葉の一番深い意味で聖霊は全部、愛であります。

要するに、全身に神の霊を受けて、パウロはひっくり返されて、本当に新しくなった、生まれ変わった。なぜ、新しくなったかというと、

「われキリストと共に十字架せられたり」

とある。キリストの十字架は何のためか。傷なき小羊をほふって罪の贖いをしたという旧約の宗教を、彼自身が即ち羔羊(こひつじ)となって、そして彼自身が大祭司となって、自らをほふって我々の罪の贖いをした。

ゲッセマネの祈りから突破して、

「お前はいきなり天界に来ては困る」

という神の聖意を受けとった。キリストはいきなり天界へ行けるひとなんです。あのエリヤよりもはるかに素晴らしい。グワーッともの凄く肉体まで霊化してしまう。罪がないから死がない。死がない人だから、霊化してしまう。それをしないで、なぜ、キリストは十字架にかかったか。

「神の聖意(みこころ)に十字架の死に至るまで従い給えり」

という。これはなぜ従ったか。我々の罪を全部背負うために、贖罪、罪のあがないのためにです。

「罪「とは「自己中心」のこと。「サルクス」（肉）であるところの自己中心であるときに、自我、我執があるのを「罪びと」という。

「その我執というものを全部私が引き受けてしまったから、もう心配いらん。お前の過去も現在も未来も全部、私は引き受けてしまった」

というのが十字架なんです。

パウロはこの十字架ぬきに、神さまに自分は従っていると思って、キリストを迫害したところが、とんでもない間違いであった。この霊的傲慢からすっかりひっくり返された。傲慢になったプニューマ（霊）がひっくり返された。そして、本当の聖霊が臨んできた。ひっくり返されてから、後でパウロはこの十字架が分かった。後でよく祈ってみたら、

「なぜキリストはあの十字架に架かったのだろう。なるほど、彼は自分の身をもっ

て旧約宗教を受けとって、これを止揚（しよう）してしまった」

ということが分かった。

「**われキリストと共に十字架せられたり。もう私は生きてない。キリストが私の中で生きていらっしゃる**」

この「キリストが」とは何ですか。キリストの御霊が、あるいは御霊のキリストが、

「キリストの御霊が私の中で生きている」

ということです。

●キリストわがうちに在りて生きたもう

ペテロもヨハネもキリストと一緒にご飯を食べていたけれども、どうにもならん。キリストは知ってらっしゃる。

「聖霊をやりたいのだけれども、ダメだ。十字架を通っていないから」

「わが受くべきバプテスマあり」

とキリストが言われたのは十字架のことです。

「十字架というバプテスマを自分は通ったら、今度はお前たちの中に聖霊がくる」

と。そこで初めて、ペンテコステを通してペテロやヨハネたちに聖霊が臨んできた。キリストと一緒にいたペテロと、使徒行伝のペテロとはガラリ違う。使徒行伝のペテロは聖霊のペテロであります。これくらいハッキリしたことはない。ペテロは波みたいなものだ。

パウロは始め非常に調子よく行っているようだったけれども、ガタッと落とされた。ヨハネはスーッと単純にしみ込んでいくようなものだ。人はいろいろです。ヨハネの福音書でもパウロの影響は完全に受けている。パウロなくしてはヨハネもペテロもない、と言っていい。それくらいパウロというのはハッキリとこの消息をつかんだ人です。

「**我もはや生くるにあらず、キリストわがうちに在りて生きたもう**」

と。十字架されたから――相対的な私は相変わらず生きているけれども――そんなものはもうすっ飛んでいる。根源の現実では、

「我はもはやなし」

ということ。

「相対的現実では、この世に私は生きています。しかし、根源現実では私はいません。私の中には聖霊が来ています。世界中の者が、誰が何と言おうとも、これを否定するわけにいきません」

と、皆さん一人ひとりがそれを言えなくては。聖霊というのは、「どうでなければ受けられない」というものではない。そのまま、パウロと同じようにぶっ倒れる。本当に降参して、平伏して、ぶっ倒れて、砕ける。そして、無条件に受ける。

砕けというのは、

「私たちの砕けたる魂が神さまは好きだ、傲慢はいかん」

ということ。相対的には人間もある時には砕けますよ。けれども、人間の砕けなんていうものは大したことはない。これ以上砕きようがない砕けというのがキリストの十字架なんです。キリストの十字架は最深の砕けです。これは、

「彼が砕かれたことによって我らの罪は赦された」

とイザヤ書53章に書いてある。

北森さんは、エレミヤの言葉から「神の痛みの神学」なんて言いだした。それは痛みは痛みだけれども、神さまがいつまでも痛んでいたらしょうがない。痛みは通るけれども、神さまは私たちを愛する時に、いつも痛みの愛であったら、どうしますか。

「お前たちはこの十字架で赦した」

と言って、神さまは白熱的に愛してくださっている。それを、「神さまは私たちの罪を思って、いつも痛んでいる」なんて冗談じゃない。こっちも痛くなってしまう。

「われキリストと共に十字架せられたり、もはや我生くるにあらず、キリスト わがうちに在りて生き給うなり」

と。「わがうちに在りて生き給うなり」ということは、

「聖霊がわがうちに在りて生き給うなり」

ということです。

●十字架・復活・聖霊は三相一貫

十字架を通ってキリストはもの凄い復活の生命を現しました。もとの肉体が甦ったのではない。霊化したところの霊体を本当にもった、今までの相対的な肉体よりもはるかに素晴らしい霊体です。四十日間現れていつでも、それが見えたり見えなくなったりして、自在なんだ。そういう復活体をもって顕れてきた。聖霊の世界はこんなに素晴らしい具体的なものだと、復活をもってキリストは証した。それにぶつかって彼らは目が覚めた。目が覚めてもまだダメなんだ。まだ心が本当に動かない。復活のキリストを見て喜んで、やっと立ち上がったけれども、まだ当てにならない。聖霊がこなければダメなんです。

だから、「十字架・復活・聖霊」は絶対に分けることができない。十字架・復活・聖霊は三相一貫している。私はこれを瞑想しているともう異言が出そうになる。私はあなた方に演説しているのではないよ。告白しているんだ、自分の中に燃えているから。

「キリストわがうちに生き給うなり」

と。そのキリストは聖霊と同じことです。パウロは「キリスト」と言おうが、「聖霊」と言おうが、「神さま」と言おうが、この三つが離せない。これを三位一体と言ってなぜ悪いか。私は何も、昔の人が言ったから神学的に私も受けとって、三位一体と言っているのではない。どれを言っても、「聖霊」と言えばその後ろに「キリスト」と「神さま」の二つがある。「キ

リスト」と言えばその後ろに「神さま」と「聖霊」がある。「神さま」と言えばその後ろに「キリスト」と「聖霊」がある。パウロの使い方はそうです。自由に使っている。

●然るに今や

今までのユダヤ教でもって、自分の信仰を偉いと思って、自分の実存が良いと思って、ユダヤ教にこりかたまっていたパウロはひっくり返されて、

「さぁ、私はこれでもって違った」

ということになった。ロマ書8章に、

「この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪に定めらるることなし。」（ロマ8・1）

とある。「今や」（ヌン）というこの言葉を私は今日、あなた方に強調したい。「今や」という。「かつては」とはギリシヤ語で「トテ」という。「トテ」ではない、「ヌン」だと。

「自分はかつてはこうであったが、しかるに今や」

という言い方は他にもある。

「然るに今や律法の外に神の義は顕れたり」（ロマ3・21）

これは非常に大事なところです。律法の義というのを今まで散々パウロがやっていた。律法をしっかり守っていたから、それで義しいと思っていた。

キリストの義というのは、

「神さま、あなたは一切です。私はこれに従います」

ということ。アブラハムがそれをやった。

「アブラハム、エホバを信ず。エホバこれを彼の義となしたまえり」

とある。アブラハムはエホバに「アーメン」と言いました。「信ずる」というのは「アーメン」という言葉です。

「エホバに対してアーメン（然り）と言ったら、エホバはこれをセデカー（義、よし）とした」

と書いてある。即ち、神さまを百%にして自分をゼロにして、神を無限大にして自分をゼロにしたときに、この関係を「義」という。「自分は良いけれども、あっちも良い」ではない。

「あっちがプラスなら、私はマイナスです」

と。そうすると物理の世界では放電する。霊の世界もそうなんです。霊の世界では、向こうをプラスにして、こっちをマイナスにすると、霊的放電がはじまる。グーッとくる、溢れてくる。

「キリストさま、あなた一切です。あなたの中に私は入ります」

と。祈入します、祈り入ります。「南無」というのはこのことです。

「南無キリスト」

という。「南無阿弥陀仏」というのは素晴らしい言葉だ。

「アミッター――無量寿無量光、永遠の生命、無量の光――の覚者の中に帰入する」

というのだから。「南無阿弥陀仏」というのはキリストそのもののことを言っているような言葉です。

あなた方、何かあったら、

「南無キリスト！」

と、沈黙の雄叫びをしなさいよ。黙ってする雄叫びは最高の雄叫びです。ただ大きな声を出すのがいいのではない。

だから、大自然の如くなりなさいという。

「沈黙は金にして、雄弁は銀なり」

というが、沈黙というのはもはや言葉では表現できないという世界なんです。ただ黙っているわけではない。

●視よ今は救の日なり

キリストは神の義の実体、義の実証体なんです。だから、

「律法の義の外に今や別な神の義が現れた」

という。「神の義」とパウロが言っているときには、その内容はキリストです。福音です。福音体、福音の実体、実相です。聖書の中には実体なき言葉はない。観念信仰はダメです。

「功なくして神の恩恵により、キリスト・イエスにある贖罪によりて義とせらるるなり。」（ロマ3・24）

と、ハッキリ言っている。キリスト・イエスの贖いによって罪から解放されて、この贖罪のキリストを受けとるときに義とせられる。贖罪という命題を信じたってダメです、それは観念信仰ですから、パウロと同じように実際に受けとらなければ。

ロマ書1章から3章20節までは、「トテ」（かつては）の世界だったが、今度は「ヌン」（今や）の世界に入った。コリント後書6章2節に、

「神いい給う『われ恵みの時に汝に聴き、救いの日に汝を助けたり』と。視よ今は恵みのとき、視よ今は救いの日なり。」（コリント後6・2）

とある。このパウロの言っている「今」はほとんど名詞的な気持で使っている。この「恵」という字はいわゆる「恩恵」という字ではない。

「今は神さまに本当に喜ばれるカイロス（時）だ」

ということ。「救」は「ソーテール」という字です。

「今や救の日である」

という。私たちは今や本当にキリストの中に無条件に入れる。十字架の門はこちらから体当たりすれば開かれて、向こうは聖霊の世界です。これは無条件に入れる。傲慢な気持で

は絶対に入れない。

「参りました！　そんなにして私を完全に救ってくださいましたか。はい、ありがとうございます」

の他に何があるか、その他に何を考えているか。「それでもまだ」なんて何を言っているか。皆さん、簡単になってくださいよ。この頃の若い人は意識過剰で困る、「我思うゆえに我あり」なんてデカルトが余計なことを言ったものだから。どうぞ単純に受けとってください。それがキリストが言った「幼児（おさなご）の心」ということです。

文学でも、お伽話、童話の国が始めで終りです。釣りはフナ釣りが始めで終り。音楽は民謡が始めで終り。何でも一番素晴らしいものは単純なものです。パウロは凄い構造をもっているけれども、彼は、中心は単純なんです。一如の世界です。キリストと一如、

「エン・クリスト」（キリストの中に）

という世界です。それからいくらでも展開していく。外からではない。「の中から」です。私も中からものを言っている。「について」なんか絶対に語っていない。

●今、私と一緒にパラダイスだ

福音にでっくわした人が本当に次の国民をつくる。一人の本ものをつくってくださいよ。それが爆発する。キリストの原始力をいただいている人間をつくる。数ではない。本当の人間を一人つくったらそれが爆発する。ルッターが、パウロが、キリストが、イザヤが、モーセが、みな一人です。

「我よりも大いなる業（わざ）をなす」

とキリストが仰ったではないですか。それは、

「私がお前たちの中に入って、いよいよ大きな業をするぞ」

ということ。キリストは誰の中にも入ってきます。「私みたいなところには、入りません」なんて、絶対にそんなことはない。「私みたいな」というところにこそ入るんだ。

「弱き者、無きが如き者、そういう者を通して」

と、パウロがコリント前書1章の終りの方で言っている。

「兄弟よ、召（めし）を蒙（こうむ）れる汝らを見よ、肉によれる智（かしこ）き者おおからず、能力（ちから）ある者おおからず、貴きもの多からず。されど神は智き者を辱（はずか）しめんとて世の愚かなる者を選び、強き者を辱しめんとて弱き者を選び、有る者を亡さんとて世の卑しきもの、軽んぜらる者、すなわち無きが如き者を選び給えり。これ神の前に人の誇る事なからん為なり。」（コリント前1・26～29）

天国は逆に、いろいろな欠陥のある人がつくっている。そして、イザヤ書35章みたいになっている。

キリストを信ずるとか、受けとるとなったら、百％の気合でいかなくては。「百％の気合

でいく」というのは、

「在るがままの自分を投げ入れる」

ということです。何か精神を統一してということではない。在るがままの自分を投げ入れる、ぶっ倒れるんです。それだけの話です。それが祈りです。そういう意味で我々は「ヌメン」（今や）の世界に聖霊と共に入った。今、今日、直ちに、ここで、ということ。

十字架の片一方の盗賊がキリストに対して傲慢なことを言いました。

「神さまの子なら俺たちを救ったらいいだろう」

と。もう一方の盗賊は、

「我々はさんざん悪い事をしたから、十字架に架かってもしょうがない。この人は何も悪いことをしていない。私は申し訳ない奴ですけれども、せめても、天国にいらっしゃる時に覚えてください」

あるいは御国を来たらせる時に

と言ったら、

「お前は、今日、今、私と一緒にパラダイスだ。我と共に今日、お前はパラダイスである」

と言った。そういう世界です。「後なる者は先に」で、何年信仰したって、本当の信仰でなかったら、一向進行しません。その代わり、今晩、新しく来て、直ちにその世界に飛び込んでしまう。全身で聞いていましたか。全身で聞いていればそういうことになる。

●永遠の根源現実

「今や」という言葉を使っているところはまだ方々にある。

「斯く今その血に頼りて我ら義とせられたらんには、まして彼によりて怒りより救われざらんや。」（ロマ5・9）

「その時に今は恥とする所の事によりて何の実を得しか、これらの事の極は死なり。然れど今は罪より解放されて神の僕となりたれば、潔にいたる実を得たり、その極は永遠の生命なり。」（ロマ6・21～22）

「今」と「かつて」を比較して言っている「今」です。「今」ということを別な言葉で言うと、「現在」です。パウロの信仰の中心は現在的である。

しかし、その現在はいつでも現在であるから、その現在の質は永遠であります。「永遠の今」という言葉があるが、正にそうなんです。滅びないものが永遠なんです、ただ時間的な長さではない。滅びざるところの現在。信というのはそのような現の世界、現にある世界、眼前にある世界なんです。目の前にある世界です。この現は現象的な現ではない。もし言うならば、根源現実です。根源の現実、根っこの現実です。根源の現実が本当の現実です。

そこには根源的現象、根源現象が起きる。
だから、キリストという実体が、聖霊が来てしまうと、滅びようがない。いつどうなろうと、永遠に生きているんです。
「**我を信ずる者は死なず**」
とヨハネ伝にも書いてあるとおり。ヨハネというのはこれを端的に受けとっている。
キリストは、
「**神の国が近づいた**」
「**天国は汝らの中にある**」
と仰った。聖霊のない所に「神の国」は絶対にない。「神の国」とは我々が一生懸命に信仰的実存で来たらせようとするようなものではない。聖霊でもって貫いて私たちの中に神の国を現象していく。そういうのが本当の神の国の世界です。ロマ書8章の、
「**今やキリスト・イエスに在る者は罪に定められることなし。**」（ロマ8・1）
と、ここはハッキリしています。
「今やこのキリスト・イエスを受けとって、その中にある」
ということ。
「**我れキリストの中に、キリストわがうちに**」
というキリスト神秘といわれる世界です。
「この中に入ってしまったら罪せられることはない。キリストが十字架でちゃんと引き受けてしまったのだから」
と。躓いても転んでも、その人は必ず立ち上がり前進していきます。とにかく、パウロが、
「**キリストの中に在って、新しくなった**」
と言っている。
「**人もしキリストに在らば新に造られたる者なり、古きは既に過ぎ去り、視よ新しくなりたり。**」（コリント後書5・17）
今や私たちは新しくなった、それは聖霊の宮、霊の幕屋です。聖霊が宿っているから、霊の宮、神殿です。神・キリスト・聖霊によって貫かれた人たちの集まりが本当のエクレシアなんです。一人が全体を背負っているような生き方をしなければ。その人の中に本当に聖霊が在ること、また、在ることを願っていくこと、それだけです。
聖霊の受け方の現象はどうでもいい。祈り方なんかどうでもいい。大自然のごとく、嵐の如く祈ったり、無風の如く祈ったり、小川のせせらぎの如く祈ったり、いろいろです。そういう祈りにみな自分であわせていけばいい。「アーメン、アーメン」と言って合わせていればいい。
こっちが柔軟にならなければいかん。空気になってくださいよ。空気は皆さんを全部囲んで抱いている。そして、鼻を通して身体の中に入って、血をきれいにしている。寝てい

ても吸っている。素晴らしいよ、空気は。

天地正大の気だ。藤田東湖の「正大之歌」に、

「天地正大の気
粋然として神州に鐘る。
秀でては不二の嶽と為り
巍々として千秋に聳ゆ。
注いでは大瀝の水と為り
洋々として八州を環る。
発いては万朶の桜と為り
衆芳与に儔ひ難し。
凝っては百錬の鉄と為り
鋭利兜を断つ可し。」

という。これが「気」の世界です。

肉体は空気、魂は霊気、これで私たちは生きている。キリストの霊気を吸っていなければ魂はダメになる。キリストの霊気を吸うのは祈り心で吸う。キリストは祈りのひとでした。いつも神さまの中に祈り入っていました。言葉で祈っているのではない、魂が祈っている。

パウロが預言者と違ったのは、彼の回心は――預言者たちはスーッと入ってきたが――パウロはひっくり返された。

「ひっくり返されて新しくなった」

という受け方なんです。受けて新しくなった。闇が光となり、罪が義となるという、そういう「ヌン」（今や）の世界です。これはみなキリストがしたんだ。彼がなったのではない。

●未来に対しての歴史的意味

そういうのが、彼の回心の過去に対する歴史的な意味です。未来に対しての歴史的意味は何かというと、後から出てきたキリスト教史において、ルッター、バイヤン、ウェスレーとかいう連中は皆、この聖霊の展開をやっているわけです。だから、キリスト教の歴史はパウロ的な、こういうハッキリした「ヌン」を体験して進んでいかなければダメです。それが今のキリスト教界はどうですか。この「ヌン」の体験、聖霊の体験をやっていない。パウロはハッキリ言っている、

「聖霊を宿さざる者はキリスト者に非ず」

と。あなた方、聖霊を宿したことを自覚しなくていいよ。そのうちに、

「何だか知らないけれども、すっかり変わってしまったな」

と、それでいいんだ。目に見えるような現象ではないんだから。ただ、本当に体感して分かりますから。分かるとは頭ではない、存在的にハッキリと分かる。

そういう意味で、使徒的信仰の中心であるところのパウロに立ち返っていくと、キリスト教の歴史を、カイロスを与えながら進んでいくところのものは、このパウロの回心の事実なんです。このひっくり返りをやって進んでいく。ひっくり返りの現象はどうだっていい。

「とにかく今までとは違ってしまった。本当に神の民となって行きます」

と言って進んで行く。この遺（のこ）れる民が神の国を継ぐ。そういう意味において、パウロの回心というものがいかに後の人たちの原動力になることか。

そこで、もう一つ課題がある。ユダヤ人は相変わらず律法にこだわっていてパリサイなんだ。ユダヤ人中のチャンピオンで、一番律法にこだわったパウロがこのようなひっくり返りをしたから、今にユダヤ人がこのパウロ的な転回に気が付いて本当に回心したときに、世界の本当の終りがくる。パウロが歴史的にそのことを預言しているわけです。

「もし我が兄弟わが骨肉の為にならんには、我みずから詛（のろ）われてキリストに棄てらるるも亦ねがう所なり。」（ロマ９・３）

「お前たちも私のように救われてくれよ。キリストに私は捨てられてもいいんだ」

と、パウロは絶叫しているではないですか。そのような霊的な火の魂となってください。この日本はもうどうにもならん。いい加減なクリスチャンが何人いたってしょうがない。そのかわり、一人が本当に棄身の生き方をしてください。そうしたらエライことになる。

パウロの回心の驚くべき事実が、そのような過去に対するところの意義と、未来に対するところの意義をもっている。これはキリストがなした。なんという人でしょうね、キリストは。歴史の一つの中心を彼において捕まえてひっくり返してしまった。大変な人です。キリストは宇宙的な大きさをもっているから、論理的な把握なんかでつかまえることができるか。大ドラマです。キリスト中心の大ドラマがこの聖書だから。